



Title	キヨル=テギン碑文西面ルーン文字銘文の新解読
Author(s)	白, 玉冬
Citation	内陸アジア言語の研究. 2025, 40, p. 39-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キョル=テギン碑文西面ルーン文字銘文の新解読

白玉冬*

はじめに

ユーラシア大陸の歴史における突厥可汗国の地位については、もはや説明する必要はない。突厥可汗国の歴史は、よく知られている漢文史料だけでなく、非漢語史料にも記録されている。とりわけ、古代突厥諸部族が自らの言語と文字、すなわち古代突厥ルーン文字で刻んだ古代テュルク語碑文は重要である。本稿で論じるキョル=テギン碑文は、最も重要な古代テュルク語碑文の一つである。

キョル=テギン (Köl Tegin, 闕特勤) は、第二突厥可汗国の初代カガンであるクトルグ=カガン (Qutluq qaγan, 骨咄祿可汗) の次男であり、第2代カガンであるカプガン=カガン (Qapγan qaγan, 默啞可汗) の甥、第3代カガンであるビルゲ=カガン (Bilgä qaγan, 毗伽可汗) の弟である。本碑文と漢籍の記録によると、キョル=テギンは731年に亡くなり、翌732年、ビルゲ=カガンはその弟のキョル=テギンのために本碑文を建てたわけである。この点に鑑みれば、キョル=テギン碑文には突厥国家の意志が刻み込まれたものといえ⁽¹⁾、突厥可汗国の歴史におけるキョル=テギン碑文の重要性が伺える。同時に本碑文は古テュルク語による歴史史料中でも最古のものに数えられる。この視点からすれば、キョル=テギン碑文の研究においては、たとえわずかな発見であっても、歴史学や文献学の分野において貢献することができる。

筆者は近年キョル=テギン碑文の現地調査を行い、西面のルーン文字碑文について、先行研究における解釈に改善の余地があることを見出した。そこで本稿を執筆し、学界の判断を仰ぐ次第である。

1. キョル=テギン碑文紹介

キョル=テギン碑文は、1889年に帝政ロシア考古学協会東シベリア支部のヤドリントセフ (N. M. Yadrintsev) 率いる探検隊によって、モンゴル高原中央域のオルホン川流域にあるホショー=ツアイダム (Khöshöö-Tsaidam) 湖畔で発見された。この碑文は同時に発見されたビルゲ=カガン碑文 (734年建立) とともに、現在はモンゴル国カラコルム市のホショー=ツアイダム博物館に収蔵さ

* 蘭州大学敦煌学研究所・歴史文化学院教授、中国歴史研究院「白玉冬工作室」首席專家 (BAI Yudong, Professor, Institute of Dunhuang Studies and School of History, Lanzhou University; Chief Expert of Bai Yudong Studio, Chinese Academy of History)

(1) この点については、例えば、護雅夫「突厥第二可汗国における「ナショナリズム」」『古代トルコ民族史研究』第2巻、山川出版社、1992、pp. 98-132を参照。



: 1 h r M y k i > r u 3 4 > ↓

i t r l t k (z) G W š B D R W uQ

図1 キョル=テギン碑文西面第1行冒頭部の uQ W R D B š W G (z) k l t r t i

れている。筆者は2018年、2019年、2023年の3回にわたり、上記二つの碑文の現物を調査した。以下、先行研究⁽²⁾および筆者のメモにより、キョル=テギン碑文の現状について簡単に紹介する。

キョル=テギン碑文はほぼ完全な状態で残っており、高さは約327 cmである。碑石の上端は半円形で、碑体は長方形である。幅は132 cm、厚さは45–46 cmである。厳密に言えば、キョル=テギン碑文は漢文と突厥ルーン文字によるバイリンガル碑文である。西面の正文として、唐の玄宗皇帝による漢文の追悼文「御制御書」（縦14行、各行約36字）が刻まれる。碑石の上端部には、一段と大きく楷書で「故闕特／勤之碑」と書かれている。正文第1行「故闕特勤碑」の下には4文字の空白をはさんで、小さな文字で「御制御書」と刻まれている。その真下には突厥ルーン文字が2行刻まれており、文字は他の面のルーン文字や同じ西面の漢字の本文より小さく、「御制御書」とほぼ同じ大きさである。西面左下には楷書で「宣統三年庫倫使者三多觀並建亭護之」とあり、清朝最後の庫倫辦事大臣であったサンドー（Sandau, 三多）がこの碑文を保護したことを記す。南面には13行の突厥ルーン文字銘文がある。東面には40行の突厥ルーン文字があり、その上方に「陳毅宣統三年八月」という漢字があり、東面の中央上部の篆額部には突厥の可汗氏族である阿史那氏のオス型羊のタムガが刻こまれている。北面には13行の突厥ルーン文字銘文があり、北東角、南東角、南西角にも、各1行の突厥ルーン文字銘文がある。

過去1世紀にわたり、キョル=テギン碑文についての研究成果は実に多いが、ルーン文字の解読にかんしては、学者の間で時には意見が分かれており、今後も議論を深めていく必要のあるところはまだ残っている。

⁽²⁾ 塔拉・恩和図布信（主編）『蒙古国古代游牧民族文化遺存考古調査報告（2005–2006年）』文物出版社，2008，pp. 184–191；劉文鎖『絲綢之路：內陸欧亚考古与歷史』蘭州大学出版社，2010，pp. 48–58。

2. 西面突厥ルーン文字銘文の新訳読

本節では、前述の三多から金石学者の呉士鑒（1868–1933）に送られた拓本の写真⁽³⁾、ラドロフ（W. Radloff）が刊行した拓本の写真を参照しつつ⁽⁴⁾、筆者が原碑を実見調査した結果に基づく突厥ルーン文字銘文のローマ字翻字（transliteration）、転写（transcription）、訳文並びに語註を提示する。文字フォントの制限により、ルーン文字による録文は省く。翻字・転写方式は森安・オチル 1999 に準ずる⁽⁵⁾。訳文中の括弧（ ）は補足説明である。なお、先行研究の判読を大きく改めた第1行の冒頭部について、筆者が現地で撮影した写真とその模写を提示する（図1）。

1. uQ WRDBšWG(z)klt r t i : i n m ü k ü l t i g n : l t u q : i n m (ü k ü l) [t] t i g n i l r t (ü k) i s g ü k ü
č g : (b i) r t (ü k) ü č n : t ü (r) ü k : b i l g a Q G N : (y i r t) a : i n m (ü k ü l) t i g n g : (ü k) ü z (d)
ü : W L [R T m]

qurd baş oğuz kältürti. inim köl tegin altuq: inim köl tegin ilärtük isig küčüg: bertük üçün: türük:
bilgä qayan: yirtä: inim köl teginig: közädü : olurt[im]

狼頭（神人）はオグズ（鐵勒）人を連れて来た。我が弟キョル=テギンが獲得した、我が弟が示した労力をささげたおかげで、私は突厥のビルゲ=カガンの地において、我が弟のキョル=テギンを「私は」守っていた。

2. i n nč W: p a : Y R G N T R Q N : a T G : [b] r t [i] m : (y) ü (l) S t (i m i z)

inanču : apa : yaryan tarqan : atıy : [b]ertim: yölästimiz.

私は（彼、即ちキョル=テギンに）イナンチュ=アパ=ヤルガン=タルカンという称号を与えた。私たちは互いに支え合った。

【語註】

1. uQ WRDBšWG(z)klt r t i = qurd baş oğuz kältürti : 「狼頭神人はオグズ即ち鐵勒人を連れて来た」。最初期にはトムセン（V. Thomsen）はこれを qurdan[juγ []örti と転写したが、翻訳していない⁽⁶⁾。同時代のラドロフはこれを uQ WRDN G..... と模写し、翻字や訳文を示さずに kordng..... と転写した⁽⁷⁾。オルクン（H. N. Orkun）はラドロフと同じように模写し、kur. d²n. ug örti と翻字したが、やはり転写と訳文を提出しなかった⁽⁸⁾。小野川秀美はこれを qurdan [y]uγ [k]örti(?) と転写し、疑問符つきで「牆ヨリ〔葬式〕彼〔見〕タリ？」と訳している⁽⁹⁾。テキン（T. Tekin）はこれを

(3) ここでは Web サイト「豆瓣」に公開されている拓影を利用した。『納蘭拉着顧惜朝的相冊：金石書畫 第二期』（<https://www.douban.com/photos/photo/2510488925/> [2023 年 7 月 1 日閲覧]）。

(4) W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei*, vol. 1, Akademie der Wissenschaften, 1892, Plate XVI.

(5) 森安孝夫・オチル編『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会, 1999, pp. 119–120.

(6) V. Thomsen, *Inscriptions de l'Orkhon déchiffrées*, La Société de littérature finnoise, 1896, p. 121.

(7) W. Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, vol. 1, Commissionaires de l'Académie impériale des sciences, St. Petersburg, 1894 (rep. Otto Zeller, 1987), vol. 1, pp. 40–41.

(8) H. N. Orkun, *Eski Türk yazıtları*, vol. 1, Devlet Basımevi, 1936, pp. 54–55.

(9) 小野川秀美「突厥碑文譯註」『滿蒙史論叢』4, 1943, p. 315.

qurīdīn [s]oγud örti と転写し、「西方のソグド人が反乱を起こした」と訳した⁽¹⁰⁾。その後、トゥグシエフ (Л. Ю. Тыгушева), 耿世民, 芮伝明らはいずれもテキンの解釈に従っている⁽¹¹⁾。

筆者が原碑を確認したところ, 5 番目の文字は N ではなく B と判読できた。WGz の z は不鮮明であるが, z と読むことに問題はない。続く k は先学によって D と読まれていた。次の lt は一見 rt (𐰽) のように見えるが, よく見ると lt (𐰽) であることがわかる。したがって, 最初の 4 文字 uQ WR D は, 先学によって復元された qurdan または qurīdīn ではなく, qurd と転写されるべきである。クローソン (G. Clauson) の古代テュルク語辞典は, qurt 「オオカミ; 虫」の項にホラズム方言形式の qurd を含めている⁽¹²⁾。ラドロフの『テュルク語方言辞典』は, qurt 「虫; オオカミ」とともに, 同義の qurd という形式のオスマン語をも掲げる⁽¹³⁾。さらに古く, 11 世紀のカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšgharī) の『テュルク語大辞典 (Dīvānū Luḡāt-it-Türk)』は, qurd の形式を含まないものの, qurt の項目にはすべてのテュルク系言語で虫を意味し, オグズ語ではオオカミを指すと明記する⁽¹⁴⁾。最新の『初期中世テュルク語辞典』によると, qurt には「虫」と「狼」を意味する二つの単語が存在し, やはり「狼」の qurt に相当する qurd がオスマン語にあるという⁽¹⁵⁾。

筆者は第二突厥可汗国の碑文から古代の東部テュルク方言において, T 音が文字 D で表記されている例は見つけられなかったが, t 音と d 音の発音位置が同じで, 両者の違いは無声音と有声音だけであることを考慮すると, qurd を qurt の異形とみることは不可能ではないと思う。したがって, 次の B š = baš が「頭; 指導者」を意味することを念頭に入れると, qurd baš は文字通り翻訳すると, 「オオカミ/虫の頭; オオカミ/虫の指導者」を意味することになる。本碑で qurd ~ qurur が「虫」の意で用いられているとは考え難い。「狼の頭/指導者」のうち, 「狼の頭」の方が文脈に最もふさわしく, さらにそれは「神人」と解釈することができると, 筆者は考える。この点は後文で詳述する。

次の部族名 WG (z) = oγuz 「オグズ」は, 古代突厥のルーン文字碑文に頻繁に現れるが, 漢籍に記録された突厥系遊牧集団である鐵勒と同一視できると考えられている⁽¹⁶⁾。

1, lt uq = altuq : 「獲得した (<v. al-)」。筆者による新たな釈読。

(10) T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*, Indiana University, 1968, pp. 238, 273.

(11) Л. Ю. Тыгушева, *Тюркские рунические письменные памятники из Монголии*, Инсан, 2008, pp. 34, 50; 耿世民『古代突厥文碑銘研究』中央民族大学出版社, 2005, p. 137; 芮伝明『古突厥碑銘研究』上海古籍出版社, 1998, p. 228; 芮伝明『古突厥碑銘研究 (増訂本)』商務印書館, 2017, p. 186.

(12) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Clarendon Press, 1972, p. 648.

(13) W. Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, vol. 2, Kaiserlich Akademie der Wissenschaften, 1899, pp. 944–945, 950.

(14) Maḥmūd-al-Kāšgharī, *Dīvānū Luḡāt-it-Türk (Compendium of the Turkic Dialects)*, R. Dankoff and J. Kelly eds. and trans., Harvard University, 1984, vol. 2, p. 269.

(15) H. Boeschoten, *A Dictionary of Early Middle Turkic*, Brill, 2022, p. 265.

(16) 小野川秀美「鉄勒の一考察」『東洋史研究』5-2, 1940, pp. 1–39; J. Hamilton, “Toquz-Oγuz et On-Uγγur,” *Journal asiatique* 250, 1962, pp. 23–63; 哈密頓 (耿升訳)「九姓烏古斯与十姓回鶻 (上・下)」『敦煌學輯刊』1983-1, pp. 130–135; 同 1984-1, pp. 128–138; 程方毅 Cheng Fangyi, “The Research on the Identification between Tiele and the Oghuric Tribes,” *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 19, 2012, pp. 81–113.

1, i l r t (ük) = ilärtük : 筆者による新しい読みである。v. ilär- は「かすかに見える」の意⁽¹⁷⁾。ここでは「示した」と訳す。

2, i n nč W: p a : Y R G N T R Q N = ĩnanču apa yaryan tarqan : 「イナンチュ=アパ=ヤルガン=タルカン」。文字が明瞭で、学术界において翻字と転写は一貫している。カーシュガリーの『テュルク語大辞典』は 'INANJ = ĩnanč 「信頼に値する」の語を掲げ、さらにこの語から「信頼できる將軍」を意味する「イナンチ=ベグ (ĩnanč bāg)」という称号が生まれたという⁽¹⁸⁾。クローソンによれば ĩnanču は ĩnanč の異形で、動詞 ĩnan- に由来し、古い時代には一般的に「信頼に値する高官」あるいはより低い地位の官称号として用いられた⁽¹⁹⁾。『舊唐書』巻 195・廻紇伝にみえる人名の伊難珠は即ち ĩnanču の漢字音写である⁽²⁰⁾。後続の apa は、もともと「先祖、祖父母、親、年長者」などを意味するが⁽²¹⁾、よく高官の称号の一部として使用される。例えば、漢籍に現れる突厥可汗国の称号である阿波達干は apa tarqan アパ=タルカンの漢字転写である⁽²²⁾。次の yaryan は動詞 yar- 「切る、割る；裁つ、裁く」から派生した名詞で、官称号として現れ、「裁判官」の意味である⁽²³⁾。唐の杜祐が編纂した『通典』巻 197・邊防 13・突厥伝上に記された突厥の一連の官称号には、yaryan に相当するものが見られない。しかし、『元史』巻 97・哈刺亦哈赤北魯伝には「哈刺亦哈赤北魯 (Qara ĩyači Buyruq), 畏兀人なり。性は聰敏にして事に習す。國王の月仙帖木兒亦都護は其の名を聞き、唆里迷 (Solmī, 焉耆) 國より徴して斷事官と為す」とある⁽²⁴⁾。この「斷事官」の古ウイグル語の原語は yaryan であった可能性がある。トルファン出土のウイグル語仏教文献 Ch/U 6956 (T III 62-1004) には yapa-qa birtāg yaryan-līy kü[č] 「すべてのものに、一様に、裁判官の力(?)」と、yaryan 「裁判官」の語が在証されている⁽²⁵⁾。要するに、本称号はビルゲ=カガンがキョル=テギンの死後に授けた名誉称号であり、「信頼できる偉大なる裁判官であるタルカン」という意なのである。

2, (y) ü (l) S t (i m i z) = yölāštīmiz : 「私たちは互いに支え合った」。これも筆者による新しい読みである。

以上、キョル=テギン碑文の西面に存在する突厥ルーン文字で書かれた銘文は、他の面の内容とは何の関係も持たない。それが正文である漢文の余白部分に刻まれたことからすると、漢文面が完成した後に突厥ルーン文字による銘文が補足して刻まれたにちがいない⁽²⁶⁾。

(17) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, p. 150.

(18) Maḥmūd al Kāšyārī, *Compendium of the Turkic Dialects*, vol. 1, p. 155.

(19) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, p. 187.

(20) 佐口透等訳注『騎馬民族史 (正史北狄伝)』第二巻, 平凡社, 1972, p. 348.

(21) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, p. 5.

(22) Ōsawa Takashi, “Who was Apa Tarqan during the Reign of the Second Eastern Turkic Kaghānate in Mongolia,” 『欧亜学刊』6, 中華書局, 2007, pp. 206-219; G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, p. 5.

(23) G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, p. 963.

(24) 「哈刺亦哈赤北魯, 畏兀人也。性は聰敏, 習事。國王月仙帖木兒亦都護聞其名, 自唆里迷國徴為斷事官。」『元史』巻 124・哈刺亦哈赤北魯伝 (中華書局, 1976, p. 3046) を参考。

(25) P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren (Berliner Turfantexte 13)*, Akademie Verlag, 1985, p. 67, l. 12.

(26) この西面の突厥ルーン文字銘文が、上下左右にスペースを保ちながら、他の面の突厥文字よりも小さい

以上に示した新たな解説案を通じて、著者はさらに一つのキーワード、即ち qurd baš「狼頭神人」について、引き続き議論したい。

3. qurd baš「狼頭神人」

突厥人とオオカミとの関係について話すとき、まず突厥の著名な狼祖伝説が想起される。しかし、この伝説は古代突厥のルーン文字碑文には見られず、もっぱら漢文史料にのみ遺存する。そのうち、最も古いのは『周書・東突厥伝』(629年完成)と『隋書・突厥伝』(629–636年編纂)であり、内容はほぼ同じである。この伝説に関しては、すでに多くの先行研究があり⁽²⁷⁾、今更ここで改めて議論する必要はない。ただ一つ注目すべきは、『隋書』突厥伝には「其の後、狼は十男を生み、其の一の姓は^{アシナ}阿史那氏なり、最も賢く、遂に君長と為り、故に牙門に狼頭の纛を建て、本を忘れざるを示すなり」とあることである⁽²⁸⁾。これは、突厥の狼祖伝説がキョル=テギン碑文よりも1世紀ほど早い時点で、すでに突厥人の間に流布していたことを示す。ちなみに、東突厥可汗国時代に属するソグド文字ソグド語とブラーフミー文字モンゴル系言語によるバイリンガルのブグト碑文にはオオカミに関する記述はないものの、石碑上部のレリーフにはメスのオオカミが子オオカミに乳を与えている図像が刻まれている⁽²⁹⁾。これもまた狼祖伝説が当時の突厥人の間に伝えられていたことを示すものである。

隋末唐初において、華北地方に割拠する群雄の一つに数えられる劉武周や梁師都がそれぞれすんで突厥に親交をする。劉武周については「突厥は武周を立てて定楊可汗^{おく}と為し、遣るに狼頭の纛を以てす」と伝えられ⁽³⁰⁾、梁師都は「突厥の始畢可汗は遣るに狼頭の纛^{タル}を以てし、號して大

文字で刻まれていることもその点を示唆する。

- (27) 内田吟風「西突厥初世史の研究」『北アジア史研究：鮮卑柔然突厥篇』同朋舎、1975、pp. 430–434；護雅夫「突厥の建国をめぐる」『古代遊牧帝国』（中公新書 437）中央公論社、1976、pp. 41–65；D. Sinor, “The Legendary Origin of the Türks,” in: *Folklorica: Festschrift for Felix J. Oinas*. eds.: Egle Victoria Zygas and Peter Voorheis, Bloomington: Indiana University Press, 1982, pp. 223–237；塞諾「突厥の起源伝説」『丹尼斯・塞諾内亜研究文選』（北京大学歴史系編訳・吳玉貴訳）中華書局、2006、pp. 55–67；薛宗正『突厥史』中国社会科学出版社、1992、pp. 39–63；정 재 훈「突厥初期史의再構成：建國神話研究의再検討을 중심으로」『中央아시아研究』14, 2008, pp. 12–24。
- (28) 「其後狼生十男、其一姓阿史那氏、最賢、遂為君長、故牙門建狼頭纛、示不忘本也」、『隋書』卷 84・突厥伝、中華書局、1973、p. 1863を参考。ちなみに『新唐書』卷 215 上・突厥伝では「牙門に金の狼頭の纛を樹つ」と紹介する。
- (29) ブグト碑文の解説に関しては、主に以下のものを見よ。S. G. Kljaštornyj & V. A. Livšic, “The Sogdian Inscription of Bugut Revised,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 26-1, 1972, pp. 69–102；吉田豊「ブグト碑文」森安孝夫・オチル編『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会、pp. 122–125；Yoshida Yutaka, “Sogdian Version of the Bugut Inscription Revisited,” *Journal asiatique* 307-1, 2019, pp. 97–108；吉田豊「ブグト碑文のソグド語版について」『京都大学文学部研究紀要』58, 2019, 1–33；吉田豊（王丁訳）「布谷特碑粟特語部分再考」『中山大学学报（哲学社会科学版）』2020-2, pp. 105–116；A. Vovin, “A Sketch of the Earliest Mongolic Language: The Brāhmī Bugut and Khūis Tolgoi Inscriptions,” *International Journal of Eurasian Linguistics* 1, 2019, pp. 188–190。
- (30) 『旧唐書』卷 55・劉武周伝、中華書局、1975、p. 2253、「突厥立武周為定楊可汗、遣以狼頭纛」。

ドシュビルゲ

度毗伽 (Tarduš Bilgä) 可汗と為す」という⁽³¹⁾。これらの記事は、狼頭の纛は突厥可汗の証として機能し、それを受け取った者が突厥可汗に服従することを示す。とにかく、突厥の狼頭の纛は突厥の国家権力の象徴だと言える。

古テュルク文献学者によく知られているように、「オオカミ」を意味する古テュルク語は *böri* である。また『新唐書』突厥伝には「衛士は附離^{ボリ}と曰う」とある⁽³²⁾。「附離」は即ち *böri* の漢字音写である。では、議論対象の *qurd baš* (狼頭神人) と *böri* との違いは何であろうか？

古代テュルク語には先行する名詞 A が後続の名詞 B を修飾する場合、通常 A に所有接尾辞 +*ning* / +*ing* などが追加されるか、B に三人称所有 (限定) 接尾辞 +*si* / +*i* などが追加されるか、またはこの両方がそれぞれに追加されることが知られている。しかし、キョル=テギン碑文の西面のルーン文字銘文においては、A = *qurd* と B = *baš* は両方とも個別になっている。つまり、両者の関係は上記のような接尾辞を書く必要がないほど密接なのである。すると、この *qurd baš* (狼の頭、狼のリーダー) は、当時の突厥人によく知られた人／物だったと推測される。

そこで漢籍を振り返ってみると、『太平御覽』巻 882・神鬼部 2・神下の條には次のように記されている⁽³³⁾。

又曰く：初め、薛延陀の將に敗れんとするや、一客有り、食を主人に乞う。主人、帳中に引き、妻をして饌を具えしむ。其の妻、顧視するに、客は乃ち狼頭の人なり。妻、隣人に告げて、共にこれを視れば、狼頭の人^オは已に主人を食らい去る。相与にこれを逐い、鬱督軍山^{チュケン}に止り、二人に見ゆ。追う者、其の故を告ぐ。二人、曰く、「我は則ち神人なり。薛延陀は当に滅ぶべし。我、来たりてこれを取る」と。追う者、懼れて退走す。延陀、竟に鬱督軍山に敗る。

ほぼ同じ内容の伝説が『太平御覽』巻 909・獸部 21・狼⁽³⁴⁾、『太平廣記』巻 297・神 7・薛延陀伝⁽³⁵⁾にも載る。護雅夫は、この伝説中の「狼頭人身の神」を、南シベリア・アルタイ地方の岩絵に描かれた獣頭人身の人物像と結びつけ、狼の仮面もしくは狼頭の毛皮を被って祭祀を行なう巫師 (シャマン) であったと推測しつつ、「この話が、テュルクの一部族たる薛延陀のあいだに行われていた一つの民間伝承であることだけはたしかである」という⁽³⁶⁾。

上記引用文に出てくる薛延陀は、隋唐時代に漠北に住んでいた遊牧民たる鉄勒集団の重要な一部であった。鉄勒は東・西突厥の征服活動において頼りにしていたメイン勢力であったが、しばしば突厥に対して反乱を起こした。『新唐書』回鶻伝下の薛延陀の条に続いて述べるように、薛

(31) 『旧唐書』巻 56・梁師都伝, p. 2280, 「突厥始畢可汗遣以狼頭纛, 號為大度毗伽可汗」。

(32) 『新唐書』巻 215 上・突厥伝, p. 6028, 「衛士曰附離」。

(33) 中華書局影印本, 1995, p. 3917.

(34) 中華書局影印本, 1995, p. 4028.

(35) 中華書局本, 1961, p. 2364.

(36) 護雅夫「古代テュルク人における「狼頭の神」について」『古代トルコ民族史研究』第 2 巻, 山川出版社, 1992, pp. 324–331.

延陀は東突厥可汗国に激しく敵対し、貞觀十五年（641）に二十万の兵を率いて、唐に下っていた突厥の李思摩部を襲うことになる。このことから、薛延陀可汗国が実際には東突厥可汗国の滅んだ身のうえに築かれ、東突厥の生き残りに敵対していたことは容易に理解できる。おそらく突厥人の目には、薛延陀こそが突厥の衰退を招いた真の敵と映っていたかもしれない。このように考えると、この薛延陀の滅亡を预言する狼頭神人の伝説は、護雅夫のように「薛延陀の間に行なわれた」とみるよりも、唐と結んで東突厥の崩壊を招いた薛延陀に対して敵意を持っていた突厥の遺民の間に生まれたとみなすのが適切に思われる。

なお、薛延陀滅亡伝説にみえる狼頭の人物を、護雅夫は狼の皮を被ったシャマンとみなした。しかし、狼頭というモチーフは、本節冒頭に述べたような突厥の狼祖伝説との関連を推測させる。また、この狼頭の人物が薛延陀の滅亡を预言した地点が「鬱督軍山」すなわちオテュケン山（Ötükän Yis）とされることを、突厥がオテュケン山を聖地として信仰していたこととも併せ考えると、問題の「狼頭の神人」とは、オテュケン山に宿っていた突厥の祖霊として理解することもできる⁽³⁷⁾。キョル=テギン碑文西面にみえる qurd baş 「狼の頭」も、この突厥人の祖先たる狼の霊・神人を指す古代テュルク語だったのではなかろうか。

おわりに

キョル=テギン碑文の 100 年以上にわたる研究の歴史において、学者たちは突厥可汗国の歴史を記録した碑文の本体部分に注目し、その西面に刻まれた 2 行のルーン文字銘文、特に第 1 行の冒頭部分についてほとんど議論をおこなわなかった。その中で、テキンによる quridîn [s]oγud örti 「西方のソグド人が反乱を起こした」という解説案は非常に影響力が高い。しかし、筆者による現地での観察に依拠すると、該当する部分は uQ WR D B š W G (z) k lt r t i = qurd baş oγuz kältürti 「狼頭神人がオグズ、即ち鐵勒人を連れてきた」と修正できる。その冒頭の qurd baş 「狼の頭」とは、漢籍中に伝えられる薛延陀可汗国の滅亡を预言した「狼頭の神人」と関連させ、突厥の祖先の霊を指しているのではないかと考える。

ところで、なぜキョル=テギンの墓の前に建てられた碑文中に、突厥の祖先の霊と考えられる狼頭神人がオグズ、即ち鐵勒人を連れてきたと書き入れたのか？ そして、なぜビルゲ=カガンがキョル=テギンを「信頼できる偉大なる裁判官であるタルカン」と追認したのか？ これらの問題については別稿に譲る。

付記 本稿は、中国国家自然科学基金項目「隋唐至北宋古突厥語族群与華夏中央王朝之間的交往史研究」（23VRC041）及び中国歴史研究院「白玉冬工作室」科研項目の成果の一部である。

⁽³⁷⁾ これについては、白玉冬「回鶻語文献中的 Il Ötükän Qutı」『唐研究』22, 2016, pp. 450–451 を参照。